

# カタログアーカイブの形成と展覧会批評の磁場 ——東京大学駒場博物館資料室の軌跡と学術教育活動の実践

今橋映子

東京大学大学院総合文化研究科教授

## **Ten Year's of our Exhibition Catalogues Archive and Catalogue Reviews Project: In the Case of Komaba Museum, The University of Tokyo**

**Eiko IMAHASHI**

**Professor, Graduate School of Arts and Sciences, The University of Tokyo, Komaba**

The author does not specialize in art history but has been engaged in archiving and reviewing exhibition catalogues for nearly 20 years. As an editorial board member of *Studies of comparative literature*, a periodical issued by the Society of Comparative Literature, University of Tokyo, the author took on the idea of reviewing exhibition catalogues in this periodical on learning that exhibition catalogues, which do not have ISBNs, were excluded from the book reviews of the national newspaper the author started to work for as a reviewer. That is to say, the author thought that it might be a role academics should play, to shed light on and review those catalogues—the purpose of the establishment of the museum; its collections; its cooperation with other museums; how exhibitions, which reflect curators' research achievements and other aspects, are planned and held; and what excellent catalogues are produced to record exhibitions.

In addition, as an editorial board member of the Society of Comparative Literature, University of Tokyo, the author established the "Graduate Students' Commission on Exhibition Catalogs" (from October 2004 to date). The responsibility of the commission is to select one or two exhibitions to be included in the exhibition catalogue section of the magazine, along with the reviews. Graduate students participate in the commission as volunteers, but through this voluntary work they participate in the editing of the magazine and in the creation of the holdings of the Archive of Komaba Museum, the University of Tokyo. Participating in this commission is a valuable academic experience for graduate students.

We established an organization named CatalTo, which is a Tokyo division of CatalPa (Catalogues d'exposition de Paris), which evaluates the catalogues of exhibitions planned by museums in Paris or in the suburbs. This activity examines those exhibition catalogues created in the past year from various perspectives, such as contents, covers, and academic values; it honors superior ones, and presents a

small award in its own right. In April 2018, the exhibition catalogs selected for review by Studies of comparative literature and those honored by CatalTo were exhibited with other related exhibits at the Komaba Museum.

These activities did not immediately resolve the question: "Where is the domain of art criticism?" However, I remember with deep emotions that my initial idea was correct—"if there is something a university could do in association with museums, it would involve the objectively examined and comprehensive collection, storage, and analysis of information, and the exercise of free, fair criticism based on those activities."

## 1……………美術批評の場はどこか

現代における美術館、博物館、文学館などの活動の幅は広い(註1)。作品収集、修復保存、研究、常設展示から教育普及活動に至るまで、市民の側から普段見えない活動もまた多々あることだろう。それでもなお、(全国巡回や複数館開催、あるいは館独自などの事業形態いかんに関わらず)毎年開催される企画展覧会はミュージアム活動の花形であり、一般市民の側から見ても、その館の活動を最も知る機会となり、学びや憩いの場としても貴重な場となる。ただし、言うまでもなく「展覧会」は一回限りのイベントであるため、その活動の詳細は基本消えてしまう運命にある。何よりもその記録としての役割を果たすのが「展覧会カタログ」であろう(註2)。筆者は美術史そのものを専門とする者ではないが、ひょんなことから、この展覧会カタログの「収集」と「批評」という仕事に20年近く携わってきた。学術教育の現場とミュージアムはいかに「関われる」のか、以下は、その試行と思考の軌跡を記すものである。

筆者の専門は比較文学・比較文化であり、「パリ神話の形成と外国人芸術家」に関する研究(『異都憧憬 日本人のパリ』柏書房1993年、『〈パリ写真〉の世紀』白水社2003年、他)を経て、この十年來は、明治大正期の美術批評家・岩村透[1874-1917]が、日本の美術行政およびアーツマネジメントの形成期に、いかに大きな役割を果たしたかについての研究に取り組んでいる。岩村透は東京美術学校(現在の東京藝術大学)の初代西洋美術史教授で、エジプト文明以來20世紀に至る欧米美術の、体系的把握を試みた最初の一人であったと今日再評価できる。それと同時に、雑誌『美術新報』『美術週報』などの編輯を通じて、美術情報の蓄積と発信に多大な情熱を傾けた人物でもあった(註3)。岩村は1900年初頭から(病で48歳の若さで倒れる)最晩年に至るまで、数十種にもものぼる英・米・独・仏・伊の海外雑誌や新聞から直接、様々な美術情報(美術家の訃報、展覧会情報、美術行政や都市の景観保護、美術界の裏話に至る)を収集し、それを日本の若い読者に向けてわかりやすい形で発信し続けた。また岩村は雑誌『美術新報』の編集長・坂井犀水と共に、近代日本初の『日本美術年鑑』(1911-13年)を刊行し、現代に至る美術年鑑の基礎

を確立したことで知られる。つまり岩村透は、「事實は思想の母」であるという信念の上で、美術批評の範疇を単に西洋の前衛芸術の紹介と賞揚に限るのではなく、文化行政や美術経営に対する批評の基盤となる「美術情報の収集・分析・発信」、現代で言うところの「アート・ドキュメンテーション」の確立にも力を注いだのであった（註4）。

ところで岩村透が活躍した明治大正期こそ、日本における美術雑誌の全盛時代でもあった。雑誌が美術界の時々刻々の状況を伝えると共に、作品批評や、展覧会評、美術家同士の親睦や共闘の場ともなっていたことが、筆者自身も研究の中で実感されるようになった。明治大正期の美術批評家には、実作者であった人物も多い（高村光太郎、木下杢太郎、石井柏亭など）。振り返って現代、美術雑誌の廃刊が続く状況の中、「一体美術批評の場はどこにあるのか」という疑問は、筆者がこの十数年抱き続けてきたものである。いまや全国紙の新聞各社は美術展の事業主体ともなっている関係からか、新聞紙上の美術批評の目配りが広いとは到底言いがたい。また百年前の岩村透のような、美術情報の徹底的収集と公開こそが、報道の仕事であるという信念も見受けられない。一方で、ソーシャル・ネットワークの急速な発達によって、多くは匿名のツイッターやブログによる美術批評や展覧会評は、それこそ奔流のように毎日流通している。もちろん首肯すべき意見もそこには多く含まれており、匿名なだけにむしろ遠慮無い鋭い意見もあって、現場にも直接届けば影響力も発揮しよう。しかし美術批評の場は、責任ある報道や学術の世界から、匿名意見交換の世界にもはや移行してしまったのであろうか。筆者も含め、学術の人間は、このような時代にどのような役割を果たすことができるのであろうか。

## 2………展覧会&カタログ批評の20年（東大比較文学会の試み）

東大比較文学会は、半世紀を超える歴史をもつ学会である（註5）。早稲田大学（坪内逍遙）と東京大学（島田謹二）は、比較文学を日本に移入、確立した拠点として知られる。比較文学という学問の進展に伴い、研究対象は文学のみならず絵画、写真、映像、思想と幅広く扱い、実証的なテキスト研究を基盤に文学・文化理論を交差させる仕事も、重んじられてきた。機関誌『比較文学研究』は年2回発行、半世紀の歴史を経て、2016年に第100号を刊行し、現在に至っている。

そもそも私自身が一編集委員として、東大比較文学会の雑誌『比較文学研究』の中で「展覧会カタログ評」のコーナーを設けようと考えた理由も、ある全国紙の書評欄を担当した折、ISBNが付いていない展覧会カタログは書評対象外だと知ったことがきっかけであった。ミュージアムの表看板として、その館の設立趣旨、収蔵品や他館との連携、学芸員の研究の成果などが多く反映される企画展が、今、どのように開催され、どのような優れたカタログがその記録として生み出されているのか、それを丹念に取り上げ、批評することもまた、学術が果たす役割なのではないか——そのように考えたのである。幸い編集委員会や学会員からの賛同も得て、第74号（1999年）から第103号（2017年）まで、18年間

に約 60 本の「展覧会カタログ評」（正確には展覧会およびカタログ双方の批評）を掲載することができ、現在も継続中である（Fig.1、表）。

ただし、いわゆる「美術史」専門でない研究者たちがなぜ展覧会&カタログ評を書く資格があるのかと訝る向きもあろう。しかし、私たちはむしろ「学際研究」を専門とする者としてこれを書いているのだという感覚がある。そこには近年のミュージアムでの企画展の性格もまた関係していよう。振り返ってみれば 1980 年頃までの日本の展覧会は、「ピカソ」展、「加山又造」展、「エコール・ド・パリ」展など、大作家の回顧展や人気流派の総合展の体を取っているものが多かったと言える。それに対し近年の企画展は、文化交流史、諸芸術間交渉、異文化表象、ジェンダー論など、それこそ諸学問の壁を軽々と超えるようなテーマが、観客動員数と研究成果の向上を狙って設定されているのではないだろうか。私たちが「比較研究」（Comparative Studies）の視野から設定している軸は「文化の越境」と「ジャンルの越境」という二つの軸（あるいはその交差）である。そのような視点から批評欄に取り上げた展覧会は、例えば「来日 450 周年大ザビエル」展、「岡倉天心とボストン美術館」展、「異文化へのまなざし」展、「2002 年ソウルスタイル」展、「瀧口修造の造形的実験」展、「薩摩治郎八と巴里の日本人画家たち」展など、自分たちの専門に近い企画展が次々と挙がってくる。美術史専門で無くとも、少なくともその当該テーマに近い専門（地域、人物、方法論など）を、各評者がしっかり持っていればこそ、その企画展の良さをむしろ十全に語る資格があるのではないか——そこに自覚と自負をもって、ささやかな学術批評の一角を形成してきたのである。

2003 年、筆者は最初の 20 本を取り纏めた上で、さらに関連するトピックを内外執筆者に依頼した上で、共著『展覧会カタログの愉しみ』（東京大学出版会）を刊行した（註 6）。これを記念して同年秋、カタログ批評とは何かを問う大規模なシンポジウム（「展覧会カタログ批評の可能性」於東京大学）を開催したのだが、これは筆者にとっても学術的な刺激を大変に受ける機会となった。まずそこで話題とされたのは、美術展という絶対的なタイムリミットを伴うイベントに間に合わせるべく制作されるカタログは、出版物として特殊な性格をもつという観察である。だからこそ一般的な刊行物とは違う批評態度が求められるのではないかと、という意見が多数出た。またアボリジニーと美術について語ったパネリストからは、「収集—保存—分析—展示」という経路を辿るミュージアム活動そのものが、いかに「西欧」「近代」的な営為であるかに意識を向けるべきであるという主張があり、これはまさしく私たちの活動の根源への自覚を促すものであった。

### 3………大学内アーカイブ（駒場博物館資料室）の形成とその軌跡

さて 2007 年 1 月、国立新美術館が六本木に開館し、アトライブラリーが公開された。これは旧アートカタログ・ライブラリー（国際文化交流推進協会、1996-2004）が所蔵していたカタログ（約 2 万冊）を移管し、それを中核として、1945 年以降国内展覧会の全てのカタ

ログを収集・公開することを目的とした本格的図書館である。その多くに ISBN が付いていない、つまり書籍として流通していない展覧会カタログを収集、分類、保存するには様々な困難があるが（註7）、2018年3月現在蔵書数は10万冊を超え（同館ホームページ公開蔵書統計に拠る）、研究者にとっては必須の場所に成長した。また2004年以降、インターネット上の「美術図書館横断検索」（Art Libraries' Consortium: ALC）および東京文化財研究所資料閲覧室 OPAC の双方を検索することによって、一般的な図書館では網羅的に収集されていない展覧会カタログのほとんどについて、美術図書館等での所蔵の有無を瞬時に検索できるようにもなった。

東京大学大学院総合文化研究科・教養学部駒場博物館（以後、駒場博物館と略称）が資料室を立ち上げようとしたのも（註8）、偶然ながらこれとほぼ同時期にあたっている。駒場博物館は60年の歴史をもつ大学博物館であるが（Fig.2）、2003年、旧第一高等学校図書館であった由緒ある建築物（一時は教務課としても使用）を大々的に改修し、そこには新しく資料室のスペースも設けられた。偶然にも同時期となった2003年の共著刊行とシンポジウム開催をきっかけとして、博物館スタッフに協力して計画を練り、全く何もない状態から展覧会カタログ資料室の構築が始まったのである（Figs.3）。当時は国立新美術館の開館もまだ遠く、（民間の）アートカタログ・ライブラリーの活動も徐々に縮小していく状況の中、ともかく大学での研究教育に必要なカタログを、自分たちの手許に収集していくことが肝要だと考えた。ISBN が付かず書店経由で購入できない国内美術館、博物館等のカタログを、アルバイト等を使って一点一点買い求めていくという作業となる。大学ゆえに予算も極めて限られる中、駒場キャンパスで学んでいる院生、学部生にとりわけ必要と思われる「学際的企画展」に的を絞り、学術的に価値の高いカタログを選別した上で、購入していくという計画を立てたのである。それから早や15年、2018年4月現在、収蔵数は17,000冊（他に雑誌紀要類・781種）を超えた。もちろん数自体から見れば、国立新美術館所蔵数の五分の一にも満たないが、「選択と集中」という原則を立ててきた御蔭で、専門のアートドキュメンタリストから「純度の高い図書室」というお墨付きを頂けるまでに成長することができた。現在では、学内の学生、院生、教職員のみならず、学外（「駒場友の会」の入会者）にも開かれた場所として信頼されている。大学組織としては極めて珍しい専門資料室とすることができるだろう。

この資料室をスタートさせた当初、国内美術館等に、（予算の関係から）カタログの寄贈を呼びかけた際、ある地方美術館の学芸員の方からそれを承諾する嬉しい御返事と共に、「できれば大学図書館が公開している OPAC にきちんと登録して頂ければ、こちらも、自分たちの活動成果が広く知られるきっかけとなるので嬉しい」という、大変貴重な御意見とアドバイスを頂くことができた。駒場博物館は早速、駒場図書館と連携を取って図書登録のシステムを構築し、2007年6月に正式に、教養学部長のテープカットをもって開室するに至った。学部の正式な組織となることができたのも、博物館スタッフと図書館スタッフが共に、展覧会カタログを大学内の一箇所にアーカイブすることの意義を深く理解し、教員

たちの研究成果や理念を支援して頂いた結果であったと思う。そして2009年からは専門司書(嘱託)による整理、保存体制も整えて、今に至っているのである。博物館スタッフの強い意向により、資料室は「保存」より「使用」を重視し、通常の美術図書室では不可能であるカタログの「貸出」も、論文を書く院生・学部生のために、一定条件のもとで積極的に行っている。

筆者もこの数年、駒場博物館にある演習室と資料室の双方を同時に使用して、学部生や大学院生のために、展覧会カタログを使用しながら「比較芸術」「比較文化論」の理論を学ぶ、といった趣旨の授業を展開している。資料室に籠もりきりになる時間、学生・院生たちの集中ぶりには驚くものがあり、様々な「収穫品」を抱えて来ては、「推しログ」(=推奨するカタログを指す彼らの造語)自慢をしあっている。そういう光景を見るとときほど、ここまでの苦労が実った——と、感慨深い時間はない。

#### 4………大学博物館と大学院生委員会の連繋

さて先に駒場博物館資料室のカタログ収集の原則は、「選択と集中」であると書いたが、その「選択」のためには、「何を選択すべきかという情報の精練」が当然必要となる。かつて淡交社が毎年刊行していた『日本の美術館と企画展ガイド』(1997-2004年)という大変優れた、便利なムックが存在したのだが、不幸にも私たちのアーカイブが開設される頃には廃刊されてしまった。一方2018年現在ではインターネット上の検索エンジン、例えば国立新美術館の「アートコモンズ」(全国展覧会情報検索)や、民間の「アートスケープ」(サイト内の展覧会スケジュール検索)などが非常に便利な存在になってきた。そうしたツールが生まれる前、筆者が東大比較文学会の編集委員として展覧会調査のために立ち上げたのが、「展覧会・カタログ院生委員会」(2004年10月-現在)である。数名~十名ほどの大学院生(文学、芸術、思想、歴史系)がボランティアの一年間任期で担当する。企画展の情報が全国のミュージアムで公開される4月頃に、独自の共有エクセル表を用いて、全国約150箇所を分担して調査する。HP上に情報が無いものは、直接電話等で問い合わせ、差し障りのない範囲で教示を願い、全体表に反映させる。GW明けには完成し、そのエクセル表の中から一年間の購入計画を立て、博物館のティーチングアシスタントが購入を進めていく……このルーティンをこの十数年で造り上げてきた。学外のインターネット上の検索エンジンが充実してきた今でも、自分たちの専門に近いミュージアムを予め選り抜いたエクセル表で、しかも、さまざまにソートがかけられる状態で使用できるこのシステムは、極めて使い勝手が良い。院生たちはこれまでも数度にわたり、システムに委しいメンバーがエクセルを改良して今に至っている。毎年院生たちにとっても新学期は多忙だが、それでもこれに携わった元メンバーは、全国のミュージアムの情報に直接接して得た新鮮な体験を後に語ってくれている。

さらに院生委員会には、このエクセル表の中から、雑誌『比較文学研究』の展覧会カタログ評欄で取り上げるべき展覧会および評者を、毎年1-2本決めるというミッションを託し

た。評者の資格は博士課程以上の院生および出身者である。院生同士だからこそ共有する情報もあり、これによって(教員が知らない)院生や OBOG 一人一人の幅広い興味が引き出され、例えば思想系の院生が、音楽やジュエリーの展覧会評を担当するなど、思わぬ成果が挙がっている。

院生委員にとってこの委員会はボランティアながら、一方で雑誌『比較文学研究』の編集の一端に参画し、一方で駒場博物館資料室のアーカイブ形成に関わるという「学術活動」に携わる良い経験となる。普段はゼミで分断されている院生同士の交流の場になるだけでなく、博物館スタッフとの実務的なやりとりや学外組織との接触など、とかく孤独になりがちな大学院生の社会生活を担保するという教育的配慮もある。委員会メンバーはカタログ特別貸出、副本の無償提供(年1回「カタログ感謝祭」の開催)、展覧会招待券の融通など、様々な恩恵も用意され、その仕事が負担にならないよう教員側は最大限の注意を払っている。委員は原則年1回交代のため、十数年間で参加者はすでに百名を超え、大学院修了後は、大学教員以外にも美術館学芸員、財団職員、図書館司書、新聞社事業部社員など、カタログと直接関わる専門職に就いた者も多い。当初は予想もしなかったのだが、実際に展覧会カタログの制作や流通の側に立った人たちが、何人もあらわれたのである。こうした歴史を辿れば、私たち教員の方が逆に、院生委員会の存在意義を後から嘯みしめることとなった。

ところで院生委員会では毎年、なるべくテーマを一つ設定した上で、小さなプロジェクトを実施することになっている。中でも 2007 年度実施の「文学館情報収集プロジェクト」は、比較文学比較文化研究室に属する院生の半数以上が文学専攻であるという特色を活かした、意義あるものとなった。通常、先述の「アートコモンズ」や「アートスケープ」の検索エンジンには、例えば世田谷文学館や日本近代文学館などはまだしも、文学館情報は網羅されていない。ところが今や、神奈川県立近代文学館や国文学研究資料館は言うに及ばず、森鷗外記念館、いわき市立草野心平記念文学館、宮澤賢治記念館、野田宇太郎文学資料館など、優れた企画展と(多くは廉価な)パンフレットを制作している文学館は数多い。しかし一方では、2007 年の調査によれば、通常展示のみで運営されている文学館が多いのも実態で、それが必ずしも良い結果を生んでいない例も見受けられる。文学館の企画展の意義とそのカタログが持つ意味については、美術展とは別途に、今後学術的考察が必要だろう(註9)。そしてその基礎資料となるカタログを、ミュージアム情報の中に同居させるという発想こそが、私たち学際研究に携わっている者が拘るべき点であると、改めて認識するのである。

## 5………展覧会カタログ表彰 (CatalTo) の開始——親陸・感興・公共性

さて先述した院生委員会は、2013 年 10 月に 10 周年を迎え、それを記念して「展覧会カタログをめぐるこの 10 年——研究、教育、展覧の現場から」というラウンドテーブルを催した(註10)。パネリストの一人、元駒場博物館資料室 TA であり、現在国立西洋美術館・主任研究員の陳岡めぐみ氏が、その発言の中で実に興味深い活動について触れた。それが、

CatalPa という活動である。CatalPa は、Catalogues d'exposition de Paris の愛称であり、2012 年度からフランスのパリにて有志団体がやっている「パリ（および近郊）のミュージアムにおける企画展覧会カタログに対する表彰」活動である。特定の団体ではなく、知識人や芸術家の有志たちが、自由な視座から選択表彰しているところに特徴がある。初期は表彰式もビストロなどで行われていたが、何年か前からはパリ第三区庁舎で、優雅な音楽会付きの小宴として催されているようである。その模様は Youtube でも公開されている。例えば 2016 年度は、61 に及ぶノミネート展覧会カタログの中から、「カタルパ賞」が、「アポリネール：詩人の眼差し」展（ガリマール、オルセー美術館）に、そして「特別賞」が、「現代芸術のアイコン」展（ガリマール、ルイ・ヴィトン社）と「ビート・ジェネレーション」展（ポンピドー美術館）に贈られた。

私たちはこの粋な表彰活動に倣って、東京でもこれを試みることはできないかと考え、2016 年に一年の準備期間を設けた上で、2017 年に第 1 回を開催することができた。CatalTo の日本語名称は、「展覧会図録品評勝手連 TOKYO」である。着想の源泉である CatalPa と同じく展覧会カタログを品評し、愉しむことを目的としているが、パリ版とは異なり、エスタブリッシュされた知識人有志ではなく、東大比較文学会の大学院生を中心に他大学院生や、若手 OB・OG と教員たちで構成されている自由な組織である。「勝手連」という名称には、常に謙虚でありたいという私たちの願いも込められている。いわゆる専門家集団というより、1 年間に出版された展覧会カタログを内容、装幀、学術的価値等のさまざまな観点から自由に品評し合い、とくに優れたものに敬意を表し、ささやかな賞を「勝手に」贈る——という活動なのである。ちなみに、第 1 回 CatalTo2016 には、100 冊あまりのノミネートから、以下が選ばれた。当日配布された受賞理由をそのまま引用する——

●CatalTo 総合賞（学術性やデザイン性、独創性、娯楽性など総合的に見て良質です）

『色の博物誌 江戸の色彩を視る・読む』（目黒区美術館）

●CatalTo 学術賞（論文や解説、書誌等が充実し、特に高い学術的価値を賞します）

『シャセリオー展 19 世紀フランス・ロマン主義の異才』（国立西洋美術館）

『花森安治の仕事 デザインする手、編集者の眼』（世田谷美術館）

●CatalTo 印刷賞（出品作品の図版や画像の再現性や色彩の美しさを賞します）

『並河靖之七宝 明治七宝の誘惑 透明な黒の感性』（東京都庭園美術館他）

●CatalTo 薄くても良いで賞（小規模ながら、解説・情報等の量や質の水準が高いです）

『近代日本のイタリア発見 岩倉使節団の記録から』（久米美術館他）

●CatalTo 一般にオススメで賞（高い独創性や娯楽性も備え、ぜひ多くの読者に手に取っていただきたいです）

『南極建築 1957-2016』(LIXIL ギャラリー1)

●CatalTo 国際交流賞 (外国の美術館や博物館との緊密な協力を賞します)

『漢字三千年 漢字の歴史と美』(東京富士美術館他)

●CatalTo ポスター賞 (優れた特色があり、デザイン性が高いと賞されるポスターです)

『女たちの絹絵 ベトナム絹絵画家グエン・ファン・チャン 3rd 絵画保存修復プロジェクト展』(上野の森美術館ギャラリー)

ご覧の通り、パリ版と違って東京の CatalTo では、大賞の他に毎年可変的に、様々な受賞理由の「賞」を設けようということになった。賞の名前も、若い人たちが自由に考案したのになっている。受賞カタログには特製の「腰帯」を巻いて、受賞理由をそれぞれ手書きし、その後駒場博物館資料室でもその形で保存される。さらには、展覧会カタログ周辺に位置するポスターの存在に目を向けたことも、新しい試みと自負している。

かくして2017年7月に、受賞美術館の展覧会担当学芸員の方々などの関係者が出席の上、文字通り手作りの表彰式がおこなわれたのであった。同時に、駒場博物館資料室の10周年記念式典も教養学部長臨席の上で行われ、私たちもはや10年の時の流れを実感することとなった(Figs.4)。

さらには2018年4月、駒場博物館の常設展示として「美術展を本の世界で」(2018年4月2日-27日)が行われ、『比較文学研究』での展評対象のカタログおよびCatalTo受賞カタログ等が全て展示された。同展では展示カタログがすべて手にとって読むことができるという図書室的環境を創出し、この初めての試みが好評であったため、今後も毎春の恒例展示になる予定である(註11、Figs.5)。

CatalToの実行を院生たちに促したときに私が驚いたことは、彼らが思いの外積極的にこのプロジェクトに案を出し、院生委員会の活動が「実質」として学外に公表されることを喜んだことである。CatalToのロゴや腰帯デザインが創案され、当日は「勝手連TOKYO」ならでは、大賞カタログのテーマ「江戸の色彩」にあやかって、パーティーに「江戸小物」のドレスコードが提案されるなど、楽しい一日となった。そしてそれ以上に私たちがさらに驚いたのは、ご招待した美術館や文学館関係者の方々が悉く、この表彰を心から喜んで下さったことであった。まさしく「勝手ながら」表彰させて頂いたこちらとしては、恐縮するばかりであったが、逆にこうした表彰活動がいかに公共性を持ち、ある意味責任の生ずる行為であるかを再確認する場ともなったのである。このプロジェクトは今後、できるだけ長く続けていきたいと願っている。

## 6………<大学>と<ミュージアム>——批評の公共性のありか

以上、筆者が偶然の出来事の連なりから、思ってもみないほど長期間関わってきた活動について振り返ってきた。「美術批評の場はどこか」という自分自身の問いが、それによって一挙に解決されたわけではもちろんない。しかしもし、大学という場にミュージアムと関わりながら出来ることがあるとすれば、それは一つには情報の客観的かつ総合的な収集と保存、分析であり、もう一つにはそれに基づいた自由で正当な批評活動であろう——という最初の予感はやはり正しかったのではないかという思いを深くしている。もちろん大学という枠内だからこそその限界や問題点も多々ある。例えばアーカイブ活動に関しては、何と云っても資金が限られているため、網羅的な収集にはならないという点が大きいだらう。駒場博物館資料室のキャパシティも自ずと限界があり、未来永劫のコレクションはなかなか難しいかも知れない。また展覧会カタログ批評に関しても、雑誌媒体に掲載する以上は圧倒的に取り上げる対象の数が少なく、それを CatalTo で補う形になるであろう。また院生委員会は毎年メンバーが交代するため、人的継続性に常に問題が生じているのも確かなのである。

こうしたあらゆる問題を解決してなお、これらの活動を続ける意味があるとすれば、それは結局、カタログアーカイブとカタログ批評は、教員や院生の研究生活と直結する部分がある、という点が肝要なのかもしれない。つまりこうして形成されたアーカイブと、書かれた批評文は、今度はそれ自体が批評される対象となっていくからである。ミュージアム活動の表看板になりうる企画展の構想と成果が、こうして大学人や若い研究者たちの思考を刺激し、それが研究の一端となり、そしてその成果が逆に社会で評価、批評されていくという循環こそ、学問とミュージアムが社会の中で相互作用を生み出していく理想形なのではないか——十数年にわたる試行錯誤の中で、私は今そのように考えている。

[註]

1. 以後本文中「ミュージアム」と書く場合には、断りのない限り筆者の意図として、美術館、博物館や文学館などまで含めて指すこととする。
2. 展覧会カタログには常設展カタログも含まれるが、本論では基本、企画展カタログを念頭に置いている。
3. 拙論「雑誌『美術新報』改革と岩村透・坂井犀水——大逆事件とポスト印象派の時代に」(『超域文化科学紀要』第19号、2014年11月)
4. 拙論「明治大正期日本のアート・ドキュメンテーション——美術批評家・岩村透による国内外美術情報の構築とその思想(上) / (下)」(『超域文化科学紀要』第22号、2017年10月/同第23号、2018年10月)
5. 東大比較文学会は、1954年創立。東京大学大学院総合文化研究科比較文学比較文化研究室の大学院生、出身者、教員を中心に構成される学術団体。機関誌『比較文学研究』(年二回発行)。
6. 今橋映子編著『展覧会カタログの愉しみ』(東京大学出版会、2003年)
7. 同書、pp.231-232の参考文献を参照されたい。
8. 駒場博物館は、美術博物館(1951年設置、代表的収藏品:デュシャン「大ガラス」東京ヴァージョン)と、自然科学博物館(1953年設置)の双方を総称する名称である。
9. 文学館についての総合的研究については、図書館情報学の岡野裕行氏が代表を務める「文学館研究会」(<http://literarymuseum.net>)の研究成果と活動が参考になる(ただし岡野氏もまだ、文学館における展覧会(とカタログ)についての集中的考察はされていないようである)。

10. このラウンドテーブルの様子は、記録冊子にまとめられ、駒場博物館 HP にて PDF が公開されている (<http://museum.c.u-tokyo.ac.jp/publication.html>) .
11. この展覧会については、駒場博物館の HP を参照されたい (<http://museum.c.u-tokyo.ac.jp/exhibition.html-Catalogues2018>) .

[図版]

- Fig. 1 『展覧会カタログの愉しみ』左)、『比較文学研究』(右)  
Fig. 2 東京大学大学院総合文化研究科・教養学部駒場博物館  
Fig. 3 同館展覧会カタログ資料室  
Fig. 4 第1回展覧会図録品評勝手連 TOKYO 時の風景  
Fig. 5 「美術展を本の世界で」展のポスターと展示風景

### 今橋映子

1961年、東京都生まれ。東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。博士(学術)。東京大学大学院教授。専門は比較文学・比較文化。主な著作に『異都憧憬 日本人のパリ』(柏書房、1993年、サントリー学芸賞ほか)、『パリ・貧困と街路の詩学—1930年外国人芸術家たち』(都市出版、1998年)、『〈パリ写真〉の世紀』(白水社、2003年、日本写真協会学芸賞ほか)、『展覧会カタログの愉しみ』(東京大学出版会、2003年、編著)、『フォト・リテラシー』(中公新書、2007年)など。

(※肩書は掲載時のものです)